

WUB東京 福島で被災者と交流



東北エンタープライズでの交流会の名嘉幸照さん(右)

WUB東京(小畑耕
行会長)の会員ら19人
は3月9、10日の両
日、今なお震災の爪痕
が残る福島県いわき市
を訪ねた。仮設住宅な
ど暮らす沖縄出身者や
地元の方々との交流し

た。

WUB東京会員で、
いわき市で原発のメン
テナンスなどに携わる
東北エンタープライズ
会長の名嘉幸照さん
(71)の案内で福島第
2原発近い楡原町の被
災地の現状を見て廻っ
た。住宅や田畑に住民
の姿が見えない地域で
放射能の恐怖を実感。
10日は名嘉さんの会
社で、仮設住宅で暮ら
す避難者15人余との交
流会に参加した。会議
室で震災直後に撮影し
た映像の被害状況説明
に見入りながら懇談し
た。|| 続きは4面に



毎月1日発行
月刊・おきなわの声
東京沖縄県人会
発行人 渡久山長輝
〒104-0028 東京都中央区八
重洲2-11-2(城辺橋ビル2階)
電話・FAX 03-3281-4321
購読料年間3,000円(送料共)
1部 200円
振替口座・00190-7-159232
加入者名・月刊おきなわの声

島市 福いわき

沿岸の被災地を廻り

仮設住いの皆と懇談

WUB東京の一行は福島県内有名観光地と合流。バスで塩屋岬へ。灯台を仰ぎ見る。

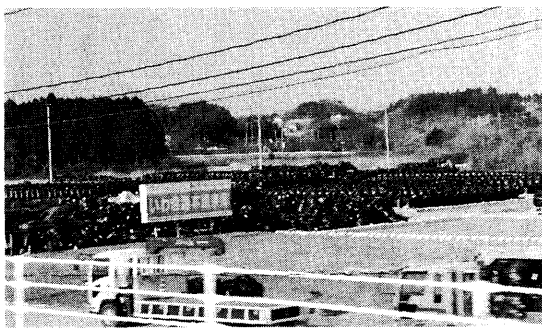
今でも未処理の瓦礫を散見した。家屋の土台と更地が広がる。仮設の観光みやげ店は活気づいていた。

盤城沿岸の県立自然公園の中を走るバスは延々と北上する。両側は松林。海から陸地奥まで幅約30㍎、松林が津波の勢いを弱めたため、奥の家屋などの被害は沿岸部ほどではなかった。自然界の荒れ

狂いを防いだ自然の松林の力を、私たちは学ばなければならぬ。松の木は枯れないでし



有意義な懇談を終えて、明るい表情で記念撮影



原発被災地域には放射性廃棄物を入れた黒袋が積まれている(バスの車窓から)

よう」と、名嘉さんの説明が印象に残る。広野町を経て通行規制地域の楡原町に入った。町のほとんどが福島第一原発から20㍎圏内だ。天神岬公園の展望台から福島第2原発の表示灯が微かに視えたらOKだった。

いわき市へ帰路、オオハクチョウが飛来する上繁岡の大堤に寄った。2年間も人との触れ合いが無いため警戒心が強く近寄らない。「被曝の鳥たちが北へ帰ると放射能の拡散だ」との声。車窓からは放射性廃棄物を入れた黒袋の山積みと土表を裏返した畑、そして人気のない家々が目立っていた。国直轄事業の徐染作業が続いている農村の風景だ。

いわき市の東北エントラプライズを訪問。浪江、富岡両町の避難者約16人余が待ち受ける交流会に参加した。仮設住宅で暮らす、読谷出身の古堅益三さん(65)、大宜味村出身の恵子さん(64)夫妻は「島へ帰ろうかと思うこともある。しかし子どもたちのふるさととは福島ですよね」。そして笑顔で「やっぱりここで皆さんと仲良く生きるわ」と話した。

会議室で、名嘉さんが震災直後に撮影した編集前の映像が大型テレビ画面に写し出され

た。当時住んでいた地域の震災前の状況を食べい入るようにつつまる皆さん、一転満開の桜並木路の画面になると歓声が沸き起る。緊張と笑いが錯綜する場面が続いた。

原発で働いていた長瀬昭昌さん(74)は浪江町から避難してきた。「あと5、6年は避難生活が続きそうだ。しかし希望を持ち続け、皆さんの絆を大切に生きていきたい」と心情を話した。

WUB一行を代表して大城友宏WUB東京副会長(沖繩ツーリス卜顧問)は、01年の米同時テロで沖繩観光が風評被害で大きな打撃を受けた際、福島県が沖繩支援ツアーを実施したことに、改めて感謝し、「今回も被災された福島の方々に沖繩でも迎えている。これからも復興支援に関わりたい」と話した。

テレビ画面に写し出され